

# 足湯ボランティア in 陸前高田

(既存の活動と連携して実施)

平成25年9月4日(水)～9月7日(土)

陸前高田市・大船渡市内仮設住宅

被災地である陸前高田市をフィールドに、足湯及びサロン活動を通して、被災地域の住民の方々の心を癒すとともに、そこから得られたつづやきをもとにこれからの支援活動のあり方について考える契機とするために実施しました。

本フィールドワークは、これまでこの活動に取り組んできた東北大学、神戸大学の学生と連携して、県内の大学生も参加する形で行いました。

夏の暑さがいくぶん和らいだ、爽やかな晴天の陸前高田市内。「奇跡の一本松」の前を通り過ぎ、高田松原の松林を思い出しながら市内最大規模の「モビリア仮設住宅」へ。震災後、何もなくなった市街地は少しずつ土地のかさ上げが行なわれ、所々島のような台地となって山沿いの住宅地を隠しはじめています。

お盆過ぎの9月上旬、モビリアの集会所は来る人もまばらで、ツクツクボウシの蝉の音がひびきわたり、ゆったりとした時間が流れていました。入居している方から漬け物をいただくなど終始くつろいだ時間が過ぎていきました。



今回の「足湯ボランティア in 陸前高田」は神戸大学と東北大学の学生ボランティアと岩手県内の大学生(参加者のべ198人)とが一緒に少人数に分かれて仮設住宅をまわり、足湯やタオルでつくるマスコット「まけないぞう」を入居者の方とつくりながら、ゆったり交流する企画でした。しかし、このゆったりさには大きな意味が隠されていたのです。遡ること一週間前、初参加の県内大学生向けに今回のボランティアの注意事項等、レクチャーをじっくり行なっています。

## 「足湯講習会」

日時:平成25年8月29日(木) 場所:岩手大学エントランスホール

対象:ボランティア活動に興味関心のある学生、社会人の若者 等

内容:講義 「ボランティア支援活動における足湯の効果と留意点」

講師 東京大学被災地支援ネットワーク 東京大学名誉教授 似田貝 香門 氏

「足湯実践講座」

講師 被災地NGO協働センター CODE海外災害援助市民センター 事務局長 吉椿 雅道 氏

東北大学東日本大震災学生ボランティア支援室コーディネーター 藤室 玲治 氏

- 被災者が癒される足湯の手法を学ぶこと → 被災地との関わり方の一つの手段
- 被災者一人ひとりを個人としてこだわること → 「出会い」「ふれあい」「今在ることに全力を尽くす」
- 足湯での「つづやき」を蓄積すること → 分析し、「実践知」として活動に活かす
- 心の負担を感じている被災者を足湯を通して発見 → 専門家へつなげる 他



実に神戸大学は16回目、東北大学は7回目のこの足湯ボランティア。既に顔見知りになった学生さんもあり、仮設での立ち振る舞いがごく自然です。…関西弁をのぞいては、岩手の学生さんも引っ張られるようにすんなり馴染んでいきました。「ここは被災地と呼ばれる場所ですが、私にとって第2の故郷のような気がします。会いたい方が大勢いますから…。」神戸大リーダーの言葉。自分の田舎のおじいちゃんやおばあちゃんと久しぶりに合う感覚のようです。「被災者一般」という匿名性の高い支援ではなく、「一人ひとりの個へ向かう支援」の実践が垣間見られました。

「モビリア」以外にも行ってみました。竹駒小学校仮設住宅、大船渡市赤崎小学校仮設住宅です。そこでも、仮設住宅の集会所では、穏やかに、にこやかに足湯ボランティアを実践していました。足湯を楽しむ方、お茶を飲みながら会話を楽しむ方、「まけないぞう」をつくる方、折り紙を大学生に教える方、時としてニコニコと話したり、亡くなった家族の思い出を語ったり…内容の濃淡の違いはありますが、ゆったりとした活動だからこそ、被災者の言葉を引き出すことができるのです。

奇をてらわず、被災者一人ひとりそれぞれに寄り添った温かい支援。そこから紡ぎ出される被災者の言葉を大事に、共感し、時として専門家に繋ぐ姿勢こそがこれからの支援のヒントになる気がしました。



## 参加した大学生の声

足湯講習会で学んだことを生かしたいと思い、初めて参加した。仮設の皆さんや他の大学との交流ができてよかった。これからも活動に参加したい。(富士大学生)

阪神淡路大震災の記憶は小さかったのではないが、親から話を聞いている。なので、東日本大震災で被災した方の役に立ちたいと思ってきている。説明をつけながら現地を実際に見て、津波の恐ろしさを実感した。(神戸大学生)